

農林省農技研 日浅治枝子

目的 今回は補助衣の(2)として、脛部に着装する補助衣について、種類と名称、形態、材料、代能、変遷とその要因等を明らかにする一方、今後の農業技術の進歩に適応する代能と防護性、加えて近代性を備えた補助衣を推奨する。

方法 昭和27年以降現在まで、全国農山村約100余ヶ所の地域において、農村婦人の用いる脛部の補助衣の実態調査、たゞに宇きヒリ調査を行なった。

結果 現在各地域において用いられる補助衣は、一般的な名称として、きやはんとよばれているが、同様のものを、はばきとよぶ地域も少なくない。農村におけるきやはんの歴史は古く、かつてははばきとよばれ、蓆や藁草、箱わらご編んだものが広く用いられていたようである。したがってその名称が、今なお各地域に残っているものであろう。現在、きやはんの形態は、平型と筒型の2種類に分けられる。平型のきやはんは、ひろげると平面の布になるもので、これを上下紐を用い、あるいは紐とコハセを用いて着装する。地方によっては、平面の布になるためにマチを入れ、あるいは縫い方によってヒダをとるなどの工夫が見られる。筒型のきやはんは、上部をひろく、下部を細く筒型に縫い、上下に紐を用いて着装する。近年筒型のもので、上下にゴムを入れるもの、または上部のみゴムを入れ、下部は紐、コハセ等とめる簡便なものに変化してきた。かつては農家において自家製作をしていたものがあるが、最近では既製品化の進行が見られ、今後の変化は益々著しくなることが予測される。